工化時報

第３３号

Since 1938

春の船橋校舎

早咲きの河津桜

図書館前から正門方向

満開のソメイヨシノとテクノプレース 15

工化会会長あいさつ

工化会会長　古橋　雄二

（昭和 52 年卒）

工化会の皆様、2017 年の幕開けに際し、ご挨拶申し上げます。会長の古橋雄二です。本年も宜しくお願い申し上げます。

さて 1 月早々の世界的に大きなニュースとしては、昨年 11 月に行われましたアメリカ合衆国大統領選挙でドナルド・トランプ氏が勝利し、1 月 20 日に第 45 代アメリカ合衆国大統領に就任したことです。今後どのような社会変化が我々に迫ってくるかはわかりませんが、変化を楽しみ、変化に対応できるようなりたいと思います。

一方、工化会では新年早々ですが、日本ミャンマー交流協会のお力添えをいただき、工化会国際交流事業の一環としてミャンマー教員の招聘の後援を昨年度に引き続き行いました。本年度はヤンゴン工科大学（YTU）工業化学科准教授である Dr. Tin Aye Khaing 先生を 1 月 23 日より 28 日の 6 日間お招きし、学生向けのご講演をはじめとし、工化会の会員向けにミャンマーの化学における研究開発の現状に関してご講演をいただきました。また Dr. Tin Aye Khaing 先生には今後の物質応用化学科と YTU との連携にもご協力いただく予定にしております。

さて本学物質応用化学科は、工業化学科として昭和 13 年（1938）年に創設されて以来、平成 30（2018）年には創設 80 周年を迎え、おおよそ 23,000 人に及ぶ卒業生を輩出する伝統ある学科として発展してまいりました。皆様には学科創設 70 周年記念会の事がまだ記憶に新しいのではないかと思いますが、時の経つのはとても早く、あと 1 年半で 80 周年を迎えようとしています。

そこで工化会といたしましては、学科創設 80 周年を記念し、校友の皆様と共に祝賀会（平成 30 年 6 月 23 日（土）を予定）を開催したいと準備を進めております。その中で、記念基金の設立および記念誌の発行を柱とする記念事業を実施したいとの趣旨で、工化会の有志と物質応用化学科教職員と

の間で検討を重ねてまいりました。その結果、このたび創設80 周年記念会及びそのための実行委員会を設立することになりました。つきましては、校友の皆様と旧交を温め合う機会として、また、後輩の学部生・大学院生の支援のため、本事業にご賛同を賜わりますことをお願い申し上げます。70周年記念基金の事業としての奨学金制度は大学院へ進学する学生さんたちにとても刺激ある魅力ある事業として受け入れられております。80 周年記念会後にも学生支援のプログラムを運営したいと考えております。学科創設 80 周年記念会にも、是非ご参加をお願い申し上げます。

ここで少し書面をお借りし、工化会のメンバーの一部を構成しております短期大学部（船橋校舎）につきましてご紹介差し上げたいと思います。短期大学部（船橋校舎）は、1950年に開学し、2020 年には創立 70 周年を迎える大変長い歴史を持つ短大です。化学系学科は、開学と同時に応用化学科が開設され、2012 年に生命・物質化学科に改組しております。学科定員は当初の 100 名から現在は 40 名に変更になりました。特長としては女子学生に好まれる学科となっています。また理工学部物質応用化学科への推薦編入学の道も開けており、この制度は、学生たちが入学した後にさらに高い目標を持っていただくためのモチベーションアップに役立っています。さてこの歴史ある短期大学部（船橋校舎）の 70 年の歴史の中、長年に渡り歩みを共にし、教育にご貢献くださいました上條治夫先生が平成 29 年 3 月でご定年されるとお聞きしております。長年のご功労に感謝の意を表すとともに、今後の先生の益々のご活躍を祈念して、エールをお贈りいたします。

最後に、工化会会員の皆様方から、今年も相変わらず工化会へご支援いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

多目的燃料添加剤の製造・販売

有限会社深澤化学研究所

〒194-0041 東京都町田市玉川学園８丁目 14－24

昭和 52 年卒 取締役副社長　深　澤　豊　史

平成 28 年度 就職状況

応化進路指導委員会
委員長　小嶋　芳行

進路指導委員会報告

昨年度と同じように学生の売り手市場であるため就職率は高い水準を保持しており、平成 29 年 2 月 6 日現在での就職率は 96%です。学生および企業とともに 3 月会社訪問が解禁、6 月に面接開始が定着してきて今年大きな混乱はなかったようです。ただ、罰則がほとんどないため決まりを守る会社も少なくなっているようです。

1 年間の進路指導委員会の活動を振り返ってみます。

3 月から実質就職活動が始まりますが、われわれはその状況を春休みであるため把握することができません。4 月になると大部分の学生が会社訪問を行い、早い人ですと面接も行っている状態となりました。この段階では学校に募集のあった企業を勧めてもあまり受け入れられませんでした。ゴールデンウィークが終わると内々定をもらう学生もでてきます。6 月になると面接もはじまり内々定をもらう学生も多くなってきます。

7 月 5 日にはミニ合同説明会を 8 号館で開催しました。5 社の人事の方に来ていただき、学生も 25 名参加しました。さらに、7 月 15 日にもミニ合同説明会を 1 号館で行い、10 社の人事の方に来ていただきました。参加した学生は 29 名です。この 2 つのミニ合同説明会で内々定をもらい、実際にその会社に行くことになった学生は 5 名でした。

3 年生に対しての就職活動の手伝いとしましては前期にインターシップへの参加を促し、研究室への配属決定後の 10 月から業界セミナーとして週 2 回（1 回ごとに 2 社）を開催して様々な業界の話をしていただきました。今年度は 20 社に参加していただきました。さらに、12 月 16 日には 1 号館 CST ホールで第 3 回「夢実現プロジェクト」を行いました。36 社の方に参加いただきました。OB の方も参加された会社も多く見受けられました。これに参加した学生は学部および

院生を含め 190 名にもなりました。午後 1 時より学生を 36 班に分け 1 回 30 分間で会社とは関係なく就職に関する質問などを学生にしてもらい、会社の方が先輩として答えていただきました。これを 2 回繰り返しました。その後は興味ある会社のブースで会社説明などを 40 分間していただき、これを 4 回繰り返しました。今年度は終了後、物質応用化学科教員と参加していただいた会社の方でささやかな懇談会を行いました。

さらに、昨年工化会会長などと話をしましてさらに低学年から就職を意識させることを決めましたので、11 月には 2 年生に対して就職する意義およびインターンシップの重要性について話をしていただきました。年明けの 1 月 12 日には再びインターンシップの重要性をマイナビの方より話をしていただきまして参加者は 100 名を越え、さらに 1 月 30 日にはインターンシップのマナー講座を行い、この時は 70 名程度の参加者を得ました。会員の皆様の会社の中で春、夏のインターンシップを実施されている場合にはご一報いただけますでしょうか。

写真上：7 月開催
ミニ合同説明会

写真下：12 月開催
夢実現プロジェクト

新学科主任に小嶋芳行先生

平成28年10月より櫛　泰典先生から無機材料化学研究室教授 小嶋芳行先生へ交代いたしました。任期は 2 年間です。小嶋先生は学科主任を務めながら学生の就職率の向上のために進路指導委員会委員長も兼任されます。OB の皆様におかれましては今後ともお力添えいただきたくお願い申し上げます。

学科創設 80 周年に向けて
ー広げよう校友の和ー

本学物質応用化学科は、工業化学科として昭和13（1938）年に創設されて以来、来年、平成30（2018）年には創設80周年を迎えます。この間、先人達のたゆまぬ努力の結果、物質応用化学科はおおよそ23,000人におよぶ卒業生を輩出する伝統ある学科として発展してまいりました。そこで古橋工化会会長からの「あいさつ」にもあるように、工化会としても創設50周年、70周年に引き続き、学科創設80周年を記念した事業を展開しようと、平成24年度（2012年度）からそのための準備委員会を立ち上げ、記念事業の企画、立案を進めてまいりました。

平成28年度はその準備委員会を発展的解消し、記念事業を実施するための学科創設80周年記念会を発足させました。記念会の会長は元日本大学副学長であり、理工学部長も務められた滝戸俊夫名誉教授にお願いし、副会長は工化会会長と物質応用化学科の主任教授にお願いすることにしております（平成28年度は古橋雄二工化会会長と小嶋芳行物質応用化学科主任に副会長をお願いしています）。

また、記念会には会長と副会長の下に記念会実行委員会を組織しました。実行委員会の主な委員は下記の19名であり、このメンバーに工化会学内役員と発起人の中の幹事の方々にも加わっていただきます。

委 員 長：栗原清文教授
副委員長：古橋雄二工化会会長、太田延幸工化会副会長、尾島光春工化会副会長、伊藤和宏工化会副会長
委　　員：安達昭郎工化会顧問、越智健二名誉教授、栗田公夫元教授、小嶋芳行物質応用化学科主任、齋藤政久工化会監事、清水　繁教授、炭田幸宏工化会役員、関口優紀工化会顧問、滝戸俊夫記念会会長、遠山岳史教授、深澤豊史工化会顧問、深津　誠教授、藤池誠治工化会顧問、真下　清名誉教授（五十音順）

さて、80周年の記念事業といたしましては、祝賀会の開催、記念誌の編集・発行、記念基金の設立を実現したいと考えています。そのための業務委員会として、祝賀会実行委員会、記念誌編集委員会および募金委員会を設置し、記

念会全体の管理や各委員会の調整を行うための総務委員会も立ち上げました。これら 4 つの委員会の委員長と副委員長は下記の方々です。

祝賀会実行委員会

委員長：深津　誠教授

副委員長：伊掛浩輝准教授、伊藤和宏工化会副会長、松田弘幸准教授

記念誌編集委員会

委員長：遠山岳史教授

副委員長：谷川　実准教授

募金委員会

委員長：清水　繁教授

副委員長：浮谷基彦准教授、太田延幸工化会副会長、尾島光春工化会副会長

総務委員会

委員長：栗原清文教授

副委員長：櫛泰典教授、小嶋芳行物質応用化学科主任、青山忠准教授、古橋雄二工化会会長、太田延幸工化会副会長

以上の各委員会の現在の活動状況ですが、祝賀会の開催日を平成 30 年 6 月 23 日(土)に予定し、会場となるホテルの選定を祝賀会実行委員会において検討しています。一方、実行委員会では、記念事業を成功裏に終わらせるために欠かせない、記念会発起人候補者、約 800 名を選出しました。現在、これら発起人候補者の方々に、記念事業にご賛同を賜るとともに、何とぞ発起人として本事業にご参加いただけるように、総務委員会から依頼状を郵送させていただいているところです。

依頼状を受け取られた校友の皆様には、是非、発起人をお引き受け下さいますように、心からお願い申し上げます。

最後に、工化会会員の皆様方には、日頃お付き合いのある同期生や、先輩、あるいは後輩の方々との絆、換言すれば「校友の和」を大切にしていただければと思います。そして、平成 30 年 6 月 23 日(土)の祝賀会の際には、その小さな「校友の和」が集まり、重なって、80 周年記念事業を通して、工化会会員を相互に繋ぐ、大きな「校友の和」が紡がれることを切に願う次第です。

（文責：栗原清文実行委員長）

東南アジア国際交流会

平成 28 年 1 月にヤンゴン工科大学(YTU)の Mar Lar Than 教授を招聘した東南アジア国際交流会は、本年度昨年に続き YTU 准教授の Tin Aye Khaing 先生（以下 Tin 先生）を工化会のご支援により招聘いたしました（期間：平成 29 年 1 月 22 日～28 日）。滞在期間中、Tin 先生からは二回のレクチャーをいただき、学生向けレクチャーでは「Current Situation of Research Activities in Yangon Technological University and Other Related Research Areas」の演題で 48 名が、工化会向けレクチャーでは「Research and Development of Chemistry in Myanmar」の演題で約 100 名が聴講しました。そのほか Tin 先生は理工学部長表敬訪問、日本 - ミャンマー交流協会事務所表敬訪問、および浅草や鎌倉周辺を観光されるなど、今後の理工学部と YTU との提携に向けて関係各所を積極的に訪問されるだけでなく、日本の史跡等も見学され日本への理解をより深いものにされていました。

Tin Aye Khaing 先生による工化会特別講演(左)

Tin Aye Khaing 先生による学生向け特別講演(右)

昨年より始まったこの会は、当時の教室主任である櫛教授が平成 26 年より企画したところに遡りますが、YTU とのコネクションは現日本大学常務理事であられます石井進先生が理事を務める「日本ミャンマー交流協会（小山事務局長およびド・スス・アウン　ヤンゴン事務所代表お二方）」の協力により作られたものであります。また、理工学部と YTU との提携のための金銭的支援が理工学部から現時点で受けられないことから、工化会の支援を受け学校間提携覚書締結に向けて進めている段階です。二年目の現在は覚書の内容を両校で確認している段階であり、少しずつ目標に向かい前進している段階であることをこの場でご報告させていただきます。　　（文責：青山　忠）

工化会賞受賞者の声

平成 27 年度 70周年記念賞奨学生支援受賞者

超分子化学研究室所属　松原　光明
（平成 28 年 物質応用化学科卒）

現在、私は半導体ナノ材料の光に対する応答性および機能性について研究を行っております。このように大学院に進学し、研究に打ち込むことができているのも、工化会の皆様からの御支援あってのことであり、心から感謝申し上げます。工化会のみならず多くの方に支えられていることに感謝しつつ、今後とも挑戦意欲を持ち研究に打ち込むことで、社会に貢献できるように日々努力邁進してまいります。最後に、工化会の皆様が今後も本大学院に進学をする学生の御支援を続けてくださることを願っております。

平成 28 年度 学会賞・学生の活動

本年度の物質応用化学科の学生・OB の学会賞の受賞等の活躍をご紹介いたします。（集計期間：平成 28 年 2 月～平成 29 年 1 月）

【教員の部】

・角田雄亮（資源）　プラスチックリサイクル化学研究会研究進歩賞

【学生の部】

・平戸祐喜（環微）　日本生物高分子学会 2016 年度大会、Best Presentation Award
・加藤真洋（超分子）　Pacific Rim Meeting on Electrochemistry and Solid State Science (PRiME)、Student Poster Session Award
・武田英幸（超分子）　第 6 回 CSJ 化学フェスタ 2016、優秀ポスター賞
・松原光明（超分子）　第 6 回 CSJ 化学フェスタ 2016、優秀ポスター賞
・斉藤雅史（有合）　理工学部学術講演会、優秀口頭発表賞
・清水加都江（生資）　理工学部学術講演会、優秀ﾎﾟｽﾀｰ発表賞
・清田徹大（生資）　理工学部学術講演会、優秀ﾎﾟｽﾀｰ発表賞

【OB の部】

・永田正巳 氏　旭日中綬章（昭和 38 年工業化学科卒、化学工学研究室）

クラス会・同窓会の報告

昭和 36 年卒同期会の開催報告

平成 28 年 3 月 6 日(日)に JR 御茶ノ水駅近くのホテル聚楽で同期会（2016 年会）を開催しました。われわれの同期会は、卒業が昭和 36 年 3 月ということで開催日を（原則として）3 月 6 日と決めて、昭和 57 年の卒業 20 周年記念会から続いています。平成 13 年の 40 周年記念会までは 5 年ごとに、そして翌 41 年会からは毎年開催してきました。今回も 30 名を越える参加者を得て、賑やかな会となりました。

年金生活のなかで、“年金支給日から次の年金支給日までは随分長く感じられるのに、2 ヶ月位はすぐ経ってしまう”と月日があまりに速く過ぎゆくことを実感しながら毎日を送っているかと思いますが、同期会の雰囲気は老いてますます元気といったところで、幹事一同参加者の笑顔に励まされています。同期会の絆が元気の源になっているようです。

幹事：石井四郎、越智健二、斉藤博、炭田幸宏、森泰

第 15 回高分子合成研究室同友会開催報告

2016 年 11 月 5 日(土)16 時より理工学部 1 号館 121 会議室にて総会、5 号館食堂にて懇親会が開催され、会員 64 名が参加した。高分子合成研究室同友会は、研究室を母体とし、卒業生、学生、職員、関係のある先生方で構成され、2002 年に発足した。会員の情報交換をはじめ、社会で活躍する会員の講演会、学生への卒業生の所属する企業の就職説明会、学生のプレゼンテーションコンテスト等、数多くの事業を行い、毎回、出席者は、100 名を超え盛況であった。しかしながら、今回は、2016 年 3 月末日をもって高分子合

成研究室が解散となったことから、最後の同友会となり、会員への経緯説明と懇親会のみの開催となった。今後は、高分子合成研究室同窓会として、卒業生のみの会を継続開催する。第1回高分子合成研究室同窓会は、2017年11月4日(土)大学食堂等で開催を予定している。

有機合成化学同窓会第２回総会の開催について(ご案内)

有機合成化学同窓会は工化時報第32号に寄稿した通り、平成27年11月21日の有機同窓会、PS会、みどり会合同総会において、3会統合が決議され、新同窓会として発足しました。この度、合同総会でご承認頂いたように、第 2 回総会を開催致したくご案内申し上げます。新同窓会は約65年間にわたって卒業生を輩出しており、同窓会総会での恩師や旧知との再会にご期待頂きたいと存じます。

開催日時：平成29年11月25日(土)【予定】

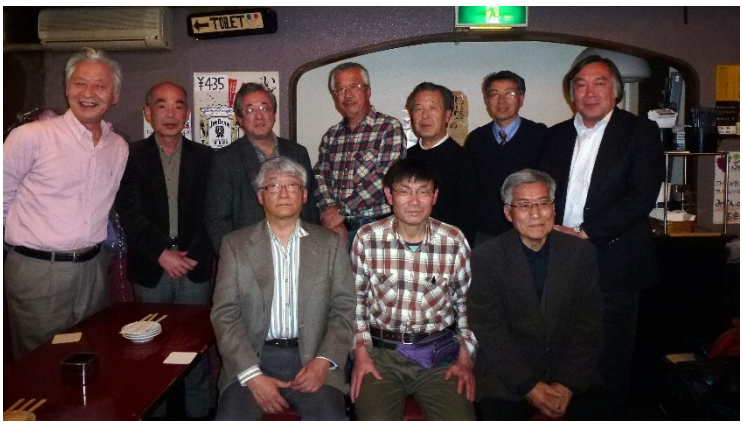
・総会の詳細は事前に幹事会を開いて検討したいと考えており、幹事各位宛には別途ご案内を差し上げます。
・幹事会　平成29年3月4日(土)

日本大学有機合成化学同窓会　会長　太田 延幸

四駆プラス H28年例会報告

澤口孝志氏(高分子合成)が音頭をとり、各研究室の有志が幹事となりできた工業化学科昭和 49 年卒同期会(四駆プラス)は、早いもので昨年、6回を数えました。年齢も65才を越えるメンバーが出始め、職をリタイアされ第二の人生

とも言うべき時間を悠々自適に過ごされているかと思います。発足の当時から比べると残念ながら様々な都合で、参加者の数が減っている状況です。しかし、会が始まると、学生当時の話題で大いに盛り上がり、また近況報告で互い様子を確かめ楽しい一時を過ごすことができた素晴らしい会でした。



皆さん、奮って四駆プラスに参加し旧交をあたためる機会をつくりましょう。

この機会をお借りして、工化会名簿作成の伊掛先生には四駆プラスの通信にあたり尽力して頂いていることに感謝申し上げます。　　（山中光徳）

中国内モンゴル自治区の沙漠化防治活動から学ぶ　ー文化の壁を越えてー

平成 28 年 6 月 27 日に、物質応用化学科 1 年生を対象に特別講義を開講しました。講師に昭和 41 年 3 月に工業化学科（化学工学研究室）を卒業され、現在、日本バイオビレッジ協会会長の長濱直様と奥様で同協会の事務局長の長濱晴子様をお迎えして、2 時間にも及ぶ熱血講義をしていただきました。

長濱様は、ご卒業後、石川島播磨重工業株式会社（現 株式会社 IHI）に入社され、化学プラント設計技師としてご活躍されておりましたが、50 歳になるのを契機に、退職され、沙漠の防治活動にまい進されております。晴子様も、看護系大学をご卒業され、看護師として、また、参議院議員政策担当秘書としてご活躍されておりましたが、重症筋無力症を発症し、看護の世界を余儀なく辞し、直様とともに防治活動を支えております。防治と伺いますと、緑地化対策

といった技術的な側面で考えてしまいますが、根深くは貧困という大きな問題がのしかかっていると伺いました。生きていくためには衣食住は必須で、このため、植林に対して関心を持つ余裕が無いのが実状であったようです。このような中で、「バイオビレッジ協会」の由来となります、植林、貧困対策、環境教育をトータルな視点で見据え、日中環境教育実践普及センターを設立し、人材育成にも注力されています。これまでの長濱様ご夫妻の二人三脚での取り組みに対して、第 10 回ヘルシー・ソサエティ賞 ボランティア部門等多くの賞が長濱ご夫婦に贈られております。

文化の壁を越えるコツを長濱様に伺ってみました。

①外国語より心：誠実さ、真摯な態度、②予防注射（自分の身は自分で守る）、③互いの文化の違いに理解、④服装、行動、発言に注意、⑤自分を素直に出す、⑥料理、歌

同じ目線で考え、相手の懐に飛び込む勇気が必要なのかもしれないです。含蓄有る重いお言葉でした。長濱様、奥様、ご講演いただき本当にどうもありがとうございました。

（文責：１年生クラス担任　伊掛浩輝）

PVC·他合成樹脂 コンパウンドメーカー
SHOWA
昭和化成工業株式会社
〒348-8585 埼玉県羽生市小松台1-603-29
TEL:048-561-5221
E-mail:SOUMU@showakvc.co.jp
ホームページ http://www.showakvc.co.jp/
昭和53年卒 代表取締役社長 池本 俊一

退職のご挨拶

短大生命・物質化学科
上條　治夫
（昭和52年修士課程修了）

物質応用化学科並びに短大生命・物質化学科の先生方には大変お世話になりました。私は昭和52年4月に旧工業化学科副手として1年間勤務し、翌、昭和53年4月から短大旧応用化学科に奉職して、この3月、平成29年で丁度40年を迎えます。

「あれから40年」と言いますが、私は中途で視覚障害を持つこととなり、教育と研究に携わることができた前半の20年間と、視覚に障害を持ちつつ化学教育の現場に立つ機会を与えて頂いた後半の20年間から私の職歴が成り立っています。

前半の20年間は短大で助手として主に2年生の実験補助を行いつつ、板橋國夫先生、滝戸俊夫先生を初め様々な先生方のご指導を得て、研究活動も進めており、妹尾学先生のご指導を仰ぐ機会にも恵まれたのですが、視覚障害を得たことで、様々な面での変更が必要となりました。

一方、後半の20年間を述べる上で、私にとって幸運だったこととして、私が視覚障害を得た時期が丁度、パソコンの画面を音声で読み上げるシステムの開発研究が進み始めた時期と重なっていて、そういうシステムを導入することで、実験を伴う研究の現場には携わることができなくなったものの、事務的な仕事には僅かずつながらも対応できるようになり、短大の先生方は勿論、物質応用化学科の皆さんのご理解も得て、座学の講義を担当させて頂くことができるようになりました。画面読み上げ用のソフトウェアを使って化学構造式や表などを含む文章を独力で作成できるようになったことが富山大学大学院生命融合科学教育部障害者枠博士課程の先生方との交流をもたらすこととなり、共同研究のご提案と同課程への入学、学位取得へと繋がりました。同時に障害学生を支援しているCWAJ（College Women's Association of Japan）から奨学金を受けることができた上に、科研費にも採択されたことは私にとって何よりの幸運となりました。

以上、私の略歴の一部を書きましたが、これらの事柄は、恩師そして物質応用化学科並びに短大生命・物質化学科の先生方のご支援・ご協力の賜物であることを申し添えて、退職のご挨拶とさせて頂きます。

退職にあたり、37年間を振り返って

短大生命・物質化学科
小川　惠三

長田洋子先生のご紹介で日大でお世話になり、早や6年が経過しました。着任時から、「化学はこんなに面白く、役に立つんだ」、と学生達に伝える努力をしてきたつもりですが、応えてくれた学生がいた一方、試験の答だけが書ければいいという学生が年々増え、基礎教育の重要さと難しさを感じた6年間です。

37年前に学位を取得以来5つの大学、2の会社に籍を置き、常に刺激を受けることができたのは幸運だったと思います。初めての給料をもらったUniv. of Penn.のVoet教授の研究室では、最新の方法による蛋白質の結晶構造解析を行うと共に、徹底的にX線光学理論を学び、これが私の基盤になりました。X線顕微鏡の開発に携わったKing's College Londonでは、仲間と理論・方法論の議論をしたことや、60数年前にR. Franklin博士がDNAのデータを得たX線カメラに触った時の感触は今も覚えています。英国より帰国する頃にはX線検出器の2次元化の気運が高まり、私も自分の装置を作るという意識でイメージングプレート利用の蛋白質用のX線回折計を設計して、分子量10万以上の蛋白質の重原子同型置換に使える装置を目指し、私の意図を理解した理学電機の技術者によって実用化されました。この装置は多くのProtein Crystallographerに使ってもらい、構造生物学に貢献できたと自負しております。思えばX線結晶学を最大のツールとする構造生物学や、物質・材料の構造と物性・機能の関係を議論することは自分の性格に合っており、それらには若い時に米国と英国の力と英知に直に触れたことが原動力になったようです。

理屈と実践にこだわった自己満足の37年ですが、最後の6年間は化学の面白さを学生に伝えきれなかったと力不足を感じております。

生命・物質化学科、物質応用化学科の方々には大変お世話になりました。皆様のご健勝と日本大学の益々のご発展をお祈り申し上げます。

平成28年度工化会事業報告

平成28年度工化会通常総会は、駿河台校舎1号館3階131教室にて平成28年5月28日(土)午後15時より、役員・会員310名（内委任状233名）の出席を得て開催されました。総会では、庶務、会計、会員、会報の各委員会の平成27年度事業報告および会計報告、ならびに平成28年度事業計画および会計予算案、栃木勝己誉教授および櫻川昭雄特任教授の理工学部校友会の個人表彰の推薦、役員の改選案、工化会の会則案の審議を行い、これらを承認しました。また物質応用化学科教室主任の櫛先生より、高分子合成研究室閉室に至る経緯と、学科におけるコンプライアンスの遵守の徹底について説明があり、また学科創設80周年記念事業のための準備委員会の伊藤委員長から、80周年記念事業の準備状況の説明がありました。なお総会開始にあたり、逝去された本会顧問細谷文夫氏の訃報を受けての追悼と熊本地震のお見舞いも兼ねて黙とうを捧げるともに、平成28年度工化記念基金状学生の表彰式も執り行いました。

さて本年度の事業計画としては、役員会・通常総会の開催、付属高校生のためのCSTオープンカレッジ2016、駿河台入試フォーラム2016、第17回日本大学理工学部物質応用化学科一日体験化学教室、CSTオープンキャンパス2016、第9回短大ものづくり＆サイエンススクール、第3回物質応用化学科夢実現プロジェクト、第10回合格者相談会、平成28年度物質応用化学専攻・同学科ならびに短大生命・物質化学科合同の学位記伝達式、物質応用化学科主催のミャンマーとの国際交流会の9つの事業に対する後援、工化会賞の授与、工化会主催の講演会の開催、工化時報の発行・発送が承認されました。

さて工化会賞は卒業時に、在学時の学術・文化等において顕著な結果を残し、工化会の名誉を高めるに貢献した学生を工化会として表彰するものですが、本年度も厳正な選考を行い、受賞者4名には、3月25日(土)に開催した大学院・学部・短大合同の学位記伝達式の際に賞状と記念品を贈り、その栄誉を讃えました。なお本学科の創設70記念事業として制定された若手研究者支援（大学院博士後期課程在学者が対象で当該年度の学位修得者）、奨学生支援（学部の成績優秀者で特待生を除く）、奨励賞（大学院・学部・短大の修了・卒業生の中で高難易度の資格免状等を取得、または好成績を収めた学生が対象）については、若手研究者支者は3名、奨学生支援は2名、奨励賞については18名に対して支援・授与が行われました。

最後に平成28年度の工化会予算についてですが、本会で

は予算を経常会計予算と特別会計予算の2種類を編成しており、平成 28 年度経常会計予算は総額 491.4 万円で、その内訳は学生支援事業費が 12.0 万円、各種講演会・行事補助費として 87.0 万円、卒業生支援事業費は 95.3 万円、その他 1.0 万円、次年度繰越金が 296.1 万円であり、特別会計予算は総額 1307.1 万円で、内訳は卒業生支援事業費に 105.1 万円、会費・寄付金郵便振替対応業務として 4.0 万円、国際交流支援に 50.0 万円、次年度繰越金として 1148.0 万円計上しています。なお平成 28 年度の会員諸氏による会費の納入状況は、本号の会費納入者氏名一覧をご覧ください。

最後に、平成 28 年度の工化会主催行事ならびに後援事業の概要を以下に報告します。

① 4 月 23 日(土)16:00～18:30
役員会：役員 74 名出席（内委任状 18 名）。

② 5 月 30 日(土)15:00～17:00
通常総会：310 名出席（内委任状 233 名）。

③ 6 月 12 日(日)
CST オープンカレッジ 2016：付属高校生 170 名が来場。

④ 7 月 10 日(日)
駿河台入試フォーラム 2016：高校生 204 名が来場。

⑤ 7 月 31 日(日)
第 16 回日本大学理工学部物質応用化学科一日体験化学教室：高校生他 57 名が参加。

⑥ 8 月 6 日(土)、7 日(日)
CST オープンキャンパス 2016：高校生 940 名が来場。

⑦ 11 月 3 日(木)
第 9 回短大ものづくり＆サイエンススクール：地域の方、のべ 172 名が参加。

⑧ 12 月 16 日(金)
第 3 回夢実現プロジェクト：企業 36 社が参加。詳細は進路指導委員会からの就職状況報告を御覧ください。

⑨ 1 月 27 日(金)16:30～17:30
工化会特別講演会：
講師：Tin Aye Khaing 先生(Yangon Technological University)
演題：Current Situation of Human Resources and Industries in Myanmar
教職員・学生・招待者を含め 102 名が参加。

⑩ 2 月 19 日(土)、26 日(日)
第 10 回合格者相談会：
19 日(土)：9 組 18 名、26 日(日)：24 組 42 名、両日で 33 組 60 名が参加。

⑪ 3 月 25 日(土)
平成 28 年度物質応用化学専攻・同学科ならびに生命・物質化学科学位記伝達式。

以上　庶務委員会

会費,寄付金納入者名簿　(平成２９年１月３１日現在)

昭和16年卒
和田守　哲治
天野　章
樫村　正久
津崎　統一
昭和18年卒
浅谷　公洋
昭和19年卒
脇　幹夫
日暮　忠弘
昭和20年卒
重藤　捨雄
澁谷　洋平
杉浦　銀蔵
昭和21年卒
石川　幸一
斉藤　光平
昭和22年卒
大川　襄治
昭和23年卒
日吉　和男
伊東　達郎
伊藤　譲
昭和25年卒
小林　猛夫
池田　富三
木根渕　弘水
榊田　雄三
古舘　和夫
吉岡　典照
吉田　耕一
昭和26年卒
鈴木　信夫
稲垣　正
太田　精一
垣内　宏
川西　正人
中野　博司
昭和27年卒
植松　貢
柏木　治彦
外山　研次
日置　隆
堀口　実
国分　兼一
井出　俊一
石田　宏
高田　芳行
和井内　徹
昭和28年卒
佐藤　正巳
村上　全司
山口　猛
大角　英男
鈴木　一成
田村　佐重
石田　壽文
岩崎　晃
徳永　静
福島　敏郎
堀　武
吉川　和夫
昭和29年卒
井上　秀雄
小林　清人
周　永實
瀧谷　俊雄
谷川　清
寺島　昌訓
奈良　富雄
中嶋　貞夫
八田　肇
横田　一郎
米山　廣保
渡辺　文夫
荻野　尭
高橋　久雄
浅川　和昭
昭和30年卒
綾野　怜
大塚　進
金井　孝道
髙野　俊彦
寺島　賢治
古川　新
森　康男
植竹　和也
笠間　三男
近藤　練太郎
昭和31年卒
川口　國雄
小松原　彬
杉浦　允
鈴木　一郎
田中　宏之
高木　弦
高橋　一正
役重　典之
山村　満明
安田　信人
川合　武夫
柿澤　正彦
雁部　敬夫
田畑　調友
吉田　幸三
昭和32年卒
阿久津　芳彦
網代　良太郎
石井　孝二
工藤　冨司
坂本　博
篠崎　清
田中　昭男
竹内　孟
竹原　晃
東海林　正
櫟本　弘昭
永田　治義
西田　金誉
藤岡　幸彦
矢作　栄甫
依田　恵市
斎木　稔
笹原　孝
渋谷　六郎
村松　勉
清治　英子
細谷　文夫
昭和33年卒
阿部　正明
青山　達也
五十嵐　輝行
伊藤　明
大井　壽
奥野　士郎
加賀　勘之助
柏崎　敏郎
久保田　景一
熊谷　祐一
小林　脩一
才木　義夫
齋藤　二郎
清水　巌
高木　三郎
滝渕　幸二
中辻　賀治朗
中山　直之
永井　滋
西野　武
箕浦　滋
宮森　隆志
吉田　靖
広瀬　俊雄
昭和34年卒
牛込　力夫
大久保　勝弘
小林　照弘
児玉　五男
玉置　憲三
早川　武夫
藤森　信正
松浦　豊紀
宮　道夫
山谷　保二
栗原　孝夫
昆野　澄夫
横倉　隆康
昭和35年卒
安達　昭郎
青木　滋夫
青木　弘
石川　好隆
内田　穆堂
笠井　啓也
金澤　成光
河合　哲次
小林　隆夫
定方　聰博
塩澤　進
白石　恵一
須永　晋
鈴木　修
瀧澤　文男
難波　純一
野島　秀次郎
橋本　卓也
原　幹夫
町田　収
谷田部　寛昭
渡邉　高章
尾崎　武二
倉形　邦英
関口　勝
高橋　健一
丸山　長資
宮本　實
島田　洋子
村川　信子
昭和36年卒
石井　照明
石川　隆夫
宇賀治　正名
漆原　孝太郎
越智　健二
仮戸　斌
木佐貫　秀彌
木村　繁夫
北林　伸一
黒尾　良康
佐藤　進
坂本　昌伍
鈴木　善治郎
炭田　幸宏
高柳　裕臣
松本　規雄
村越　英彦
村田　敏弘
柳　弘来
横山　樹静
渡辺　鍈治
佐藤　貞男
砂川　憲二
野村　友次
中村　紀史
桔梗　隆
小串　照宗
昭和37年卒
伊地知　龍清
奥山　正之
小谷　嘉孝
小林　昭朗
駒井　俊雄
斎藤　一郎
清水　大三
庄司　翠
杉崎　秀夫
丹野　彰
塚田　政弘
長谷川　修一
丸林　功
宮沢　武次
石岡　龍右
磯崎　昭徳
長田　守一
長友　良久
原　周二
植木　庄左衛門
佐々木　賢明
昭和38年卒
吉井　彰子
井野　二陸
佐野　直道
稲垣　甫
大野　維夫
大橋　隆
大村　俊晴
木村　次雄
久喜　徹
小松　允
栗田　公夫
坂本　一
竹内　栄多
塚田　豊
中原　章夫
永田　正巳
西山　孝彦
原田　文雄
渡部　長幸
荒谷　作松
新井　政義
長嶋　潜
白石　益郎
杉田　松生
藤野　裕
鈴木　忠
藤井　政孝
昭和39年卒
秋草　幸雄
秋本　幹夫
石井　国昭
石川　和正
金田　紘一
神谷　中
亀村　矗
渡辺　久和
児玉　義宏
斎藤　伸之
斉藤　博之
斉藤　守圀
瀬尾　宏
竹石　肇
武田　幸久
奈良木　亨丞
中沢　甫
中田　博
中林　実
野口　文雄
野尻　義雄
原　襄輔
堀　是治
松村　政之輔
田幡　安郎
山崎　彰
山崎　恭弘
横田　力男
和田　高伸
青木　匡
香山　武夫
北村　隆
小屋原　英雄
鈴木　良治
田中　誠悦
高松　武生
冨士　光男
寺山　洋子
矢野　彰一郎
昭和40年卒
稲葉　清彦
岩崎　紘一
上田　輝世
上野　公雄
牛山　恵次
沖本　武且
上條　陽一郎
佐藤　瑞雄
土田　紘一
飯野　宏治
高橋　志郎
武井　秀彦
高間　伸一
丹野　隆善
西脇　鉄雄
幡野　匡彦
三谷　治郎
清水　博太郎
飯原　打越
山岡　景仁
有田　喜一
昭和41年卒
楠　勝行
藤池　誠治
木村　勲
沢田　金吾
嶋田　晋廣
舘　敏夫

白龍　美津夫
彦田　一夫
高桑　豊
玉應　亨三
昭和42年卒
赤坂　洋輔
岡見　宏道
鈴木　健之
栃木　勝己
中井　忠男
永田　一雄
豊田　文江
古阪　一昭
溝口　隆一
山下　睦之
稲川　栄一
長田　義男
佐藤　馨
田中　秀也
高橋　秀雄
富田　潤一
能代田　順久
山崎　博
昭和43年卒
浅井　保雄
宇智田　俊一郎
海上　幸三
北村　正孝
佐藤　彰徳
梅北　司
佐藤　精二
進藤　宣詔
昭和44年卒
安藤　純一
石井　和夫
石山　利男
井上　隆
今脇　秀雄
大橋　正宣
桜井　浩平
信濃　孝之
新藤　豊彦
望月　正二
花井　秀之
堀　昱弘
八幡　順一
横山　二郎
小栗　勝治
小林　勉
原　幸夫
剱持　晃
昭和45年卒
小林　満
篠崎　勝彦
田中　碩
滝戸　俊夫
土田　久
常木　英夫
中澤　之博
永島　一男
永田　勝彦
服部　正隆
平塚　良一
宮内　和司
宮川　晃一
望月　昭宏
森川　美次
森崎　正美
加村　尚喜
寺田　高徳
森田　尚
昭和46年卒
菊田　茂
小谷　将彦
齋藤　政久
島津　学
鈴木　重衛
鈴木　博一
高橋　秀樹
髙村　誠一
丹野　幸久
牧原　信太郎
三宅　久利
三瓶　辰一
飯田　隆
昭和47年卒
井上　丈治
駒屋　伸雄
齊藤　菊夫
丹呉　秀博
何木　正芳
藤木　孝人
森　伸一
飯倉　登美雄
昭和48年卒
加来　文隆
後藤　省二
櫻川　昭雄
指田　高好
重藤　峻一
渋谷　修
中村　宗光
長谷川　一夫
平林　明夫
山中　操
吉井　康雅
渡辺　明典
大高　由輝
川津　義人
小宮　清子
坂口　信昭
藤井　克彦
矢田　智
関口　優紀
昭和49年卒
青木　壮慈朗
牛山　仁司
久保　隆
小島　元昭
小茂田　英男
佐藤　憲一
澤口　孝志
末木　康行
湯川　吉美
武安　栄樹
館　徹
野澤　美文
野原　孝司
元木　英二
山崎　純一
田島　平良
昭和50年卒
上田　賢二
関　孝光
高橋　克衛
野原　正男
関口　真理
牛込　淳彦
長井　一良
大川　由明
皆川　文明
昭和51年卒
荒沢　康夫
井之上　佳三
内野　好夫
重盛　正男
佐野　勝栄
昭和52年卒
伊藤　隆夫
栗村　嘉明
荻原　謙二
酒井　久男
深澤　豊史
古橋　雄二
前川　幸生
山田　勝彦
関口　晴久
生方　正之
新国　貞倖
昭和53年卒
伊藤　俊広
五十嵐　博
太田　一雄
勝亦　章行
高木　英行
原田　茂
原田　哲也
深津　誠
渡辺　寿悦
黒澤　錬二
昭和54年卒
浅野　祥司
榎本　充男
小笠原　幸道
太田　延幸
大野　正博
久保　俊一
小林　良夫
杉山　文敏
中村　眞理子
服部　洋一
目良　昌三
山中　一典
山元　隆史
横森　英俊
昭和55年卒
小笠原　守人
金子　堅司
黒瀬　健介
小出　真
多田　康男
戸塚　宏
森　弘通
木村　昌広
昭和56年卒
池田　実
古屋　実
奥田　直史
今野　直哉
後藤　真一
熊谷　一弘
植松　烈平
大沼　明
三橋　昭男
有川　俊一
木屋　幸蔵
昭和57年卒
黒坂　和弥
田島　みゆき
井上　みどり
小暮　勝彦
小椚　幸夫
中村　宏昭
中村　明裕
久松　美樹
宮入　尚史
伊藤　和宏
梅田　栄一
桑折　敬子
佐藤　慎一
末澤　二朗
昭和58年卒
岩崎　好高
飯田　隆久
伊藤　好一
栗原　清文
田村　精一
高山　利治
長　茂輝
谷田貝　仁恵
原川　優子
矢島　浩之
山田　美穂子
久保田　博明
立岩　洋
寺嶋　一彦
菅原　節子
昭和59年卒
小峰　昌弘
清水　繁
長島　敬明
古澤　功
昭和60年卒
太島　佐知子
石見　勝洋
鈴木　義弘
村松　岳彦
飯田　岳之
昭和61年卒
片桐　正志
小嶋　芳行
津田　聡司
萩原　俊紀
昭和62年卒
加藤　慎次郎
塚原　文子
栗田　直人
幾留　孝司
清水　恵樹
梅山　伸一
昭和63年卒
石井　睦子
中村　葉子
歳森　幹生
三井　宏
村山　竜一
中道　幹芳
平成元年卒
磯崎　誠也
木方　真理子
黒田　美和子
田辺　進吉
丸山　浩二
三柴　晶子
栗田　雅子
平成2年卒
石川　恵子
平成3年卒
永田　晶義
村原　伸
高田　昌子
平成4年卒
宮崎　裕子
林　由浩
藤池　一誠
松田　和夫
加來　洋子
平成5年卒
岩渕　弘晃
小泉　公志郎
米田　哲也
平成6年卒
小池　芳暁
石黒　香織
砂沢　周一
平成7年卒
岡田　賢識
谷合　哲行
平成8年卒
仁平　勉
平成9年卒
浮谷　基彦
林　秀憲
平成10年卒
伊掛　浩輝
岩瀬　直子
平成11年卒
浅野　賢一
樋口　孝夫
平野　壮哉
平成12年卒
山崎　章
平成13年卒
藤田　尚之
平成14年卒
井上　寿男
角田　雄亮
吉川　賢治
平成15年卒
佐々木　大輔
星　徹
平成17年卒
赤澤　寛行
平成19年卒
伊藤　拓哉
平成20年卒
小出　優一郎
平成21年卒
吉田　隼人
平成23年卒
太田　直裕
春日　龍史
平成24年卒
石井　一隆
工藤　慎平
渡貫　泰寛
平成25年卒
近藤　駿平
関口　紘樹
田村　高大
早川　麻美子
松山　史典
曽村　岳郁
平成26年卒
野中　裕名
鈴木　眞平
古川　拓哉
本城谷　拓
中村　汐梨
平成27年卒
清水　健成
田中　里奈
教職員
青山　忠
西村　克史
西宮　伸幸
櫛　泰典
梅垣　哲士
須川　晃資
小川　惠三
鈴木　佑典
仁科　淳良
大内　秋比古

以上　637名

編集後記

先日、卒業研究発表会、修士論文発表会も終わり、本年度も終わりに近づいてきました。物質応用化学科も慌ただしく来年度に向けた準備が始まっております。

さて、当学科の研究室が集約されている2号館では、材料創造研究センターを刷新するべく、大規模な工事が始まっております。これはセンター所有の共通装置をきれいに改装された地階の大部屋（現第二準備室）に集約することで、“都会にある一大研究センター”を目指すものです。学外研究機関との密な交流と、研究レベルの更なる向上に繋がるものと期待できます。これからの物質応用化学科に是非ご注目下さい。

（工化時報編集委員　須川晃資）

お知らせ

平成29年度の行事予定

5/27(土)　工化会総会　15:00～（8号館を予定）
7月末　　一日体験化学教室
8/5(土)、8/6(日)　CSTオープンキャンパス2017
11月3日(金)短大ものづくり＆サイエンス・スクール2017
11月4日(土)理工学部ホームカミングデー

連絡先

・住所変更に関する問合せ→会員(深津 TEL:03-3259-0805)
・会費に関する問合せ→会計（清水 TEL:03-3259-0803）
・工化時報に関する問合せ→会報(萩原 TEL:047-469-5360, FAX:03-3293-7572, E-mail: jihou-mac-cst@nihon-u.ac.jp)
・上記以外の関する問合せ→庶務(栗原 TEL:03-3259-0822)

広告募集

工化時報では会社広告を募集しています。掲載の詳細につきましては会報委員会までお問い合わせください。
掲載料　１件：１０，０００円

発行所

東京都千代田区神田駿河台１－８
日本大学理工学部工化会会報委員会

小川　誠，永島一男，橋本徳子，須川晃資，谷川　実，
遠山岳史，西村克史，萩原俊紀

学生編集委員

ホームページ，http://www.chem.cst.nihon-u.ac.jp/index.html